

司式:山本 典子
奏楽:橋本恵美子

前奏:「おおいなる光よ、三位一体よ」(J.P.スウェーリンク)

招詞:真理の霊が来ると、あなたがたを導いて真理をことごとく悟らせる。(ヨハ16:13a)

讚美歌:18「心を高くあげよ！」

交読詩編 8篇

8:1【指揮者によって、ギテイトに/合わせて。賛歌。ダビデの詩。】

8:2 主よ、わたしたちの主よ/あなたの御名は、いかに力強く/全地に満ちていることでしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます

8:3 幼子、乳飲み子の口によって、あなたは刃向かう者に向かって砦を築き/報復する敵を絶ち滅ぼされます。

8:4 あなたの天を、あなたの指の業を/わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置なされたもの。

8:5 そのあなたが御心に留めてくださるとは/人間は何ものなのでしょう。人の子は何ものなのでしょう/あなたが願ひてくださるとは。

8:6 神に僅かに劣るものとして人を造り/なお、栄光と威光を冠としていただけ

8:7 御手によって造られたものをすべて治めるように/その足もとに置かれました。

8:8 羊も牛も、野の獣も

8:9 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。

8:10 主よ、わたしたちの主よ/あなたの御名は、いかに力強く/全地に満ちていることでしょう。

朗読聖書①出エジプト記 8:12-15

◆ぶよの災い

12 主はモーセに言われた。「アロンに言いなさい。『杖を差し伸べて土の塵を打ち、ぶよにさせてエジプト全土に及ぼせ』と。」

13 彼らは言われたとおりにし、アロンが杖を持った手を差し伸べ土の塵を打つと、土の塵はすべてぶよとなり、エジプト全土に広がって人と家畜を襲った。

14 魔術師も秘術を用いて同じようにぶよを出そうとしたが、できなかった。ぶよが人と家畜を襲ったので、

15 魔術師はファラオに、「これは神の指の働きでございます」と言ったが、ファラオの心はかたくなになり、彼らの言うことを聞かなかった。主が仰せになったとおりである。

朗読聖書②ルカによる福音書 11:14-23

◆ベルゼブル論争

14 イエスは悪霊を追い出しておられたが、それは口を利けなくする悪霊であった。悪霊が出て行くと、口の利けない人がものを言い始めたので、群衆は驚嘆した。

15 しかし、中には、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者や、

16 イエスを試そうとして、天からのしるしを求める者がいた。

17 しかし、イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。

18 あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪めすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。

19 わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。だから、彼ら自身があなたたちを裁く者となる。

20 しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。

21 強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。

22 しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。

23 わたしに味方しない者はわたしに敵対し、わたしと一緒に集めない者は散らしている。」

祈祷

聖なる神さま、聖名を賛美致します。どうぞ、平和の御国を来たらせてください。

先週、私たちは聖霊降臨節・子供の日・花の日礼拝を恵み豊かな全体礼拝として献げることができました。この日に始まった私たちの一週間を神さまが守り導いてくださったことに感謝致します。神さまの恵みの光で進むべき道を照らして頂きましたのに、私たちの歩みは心ものなく、道から逸れそうになりながら、何とかこの礼拝へ戻って来ることができました。どうぞこの礼拝を、一人ひとりの真の悔い改めの時とさせてください。同じ失敗の繰り返しでなく、この礼拝から、また新たな一歩を踏み出せますように。

神さま、昨日は小倉信夫さんが洗礼を受け、教会の群れに加わって下さいましたことに心から感謝致します。信夫さんとご家族に、豊かな祝福がありますように。そして、私たちが共に祈り合っていけますように。

今月は子供の日・花の日を覚え、ことさら世界の子供たちが平和の中で過ごせる日が一日も早く来ることを切に祈り求めます。また、教会は今年、創立 101 周年目を迎えることができました。創立の時からこの教会が大切にしてきた信仰の継承を志すと共に、新たな伝道の展開をしていけますように、私たちを力づけてください。その一つとして行われます来週の上映会、再来週のホームカミングの時を、どうぞ実り豊かな一日にしてください。

神さま、病の床から、また、夫々の場からライブ配信で礼拝に参加している兄弟姉妹、また、ここに集う私たち、皆が心一つにして、礼拝を献げることができますように。特に苦しさ、寂しさ、辛さを抱えている兄弟姉妹をどうぞ主が励ましてください。

今日の礼拝の説教者として、大谷昌恵先生を備えて頂きありがとうございます。本日後行われます大谷先生の就任式とお祝いの会が恵み豊かな時となりますように祈ります。そして、先生が聖霊に満たされ、御言葉を豊かに取り付けてくださいますように。私たちが心を開いて十分に御言葉を受け取ることができますように聖霊が助けてください。

本日、日本の各地で、また世界の各地で献げられています全ての礼拝が、万物の創造主なる神さまを心より賛美するものとなりますように。

この祈りを尊き主イエス・キリストの聖名を通してお献げいたします。アーメン。

讚美歌:352「来たれ全能の主」

説教 「悪霊を追い出す力」

大谷昌恵

主イエスの行った奇蹟物語は福音書に多く記されていますが、中でも、病気の人を癒す話は多く取り上げられています。これは現代にも通じることですが、やはり病気というものが命に関わることであり、人間にとって関心の深い事柄であることと言えるからでしょう。

イエスの時代、病や障害は悪霊の仕業によるものとされていました。病

気になりたい人はいません。そして、それは何時、どんな状況で自分に襲い掛かって来るか分かりません。突然、思いもかけないときに病気になることを考えれば、それはある意味、現代でも、悪霊の仕業のように思われるものかもしれません。もちろん、現代では治療の方法もあり、予防することも出来ることを考えれば、今の世の中で病気が障害は悪霊の仕業であると考える人はいませんが、どこかに、そのような考えが潜んでいると言えなくもないかと思えます。

本日お読みした新約聖書の箇所は、“ベルゼブル論争”として『マタイによる福音書』、『マルコによる福音書』にも記されています。『ルカによる福音書』では、“イエスは口の利けない人から悪霊を追い出していた”とあります。ここで「口の利けない人」と訳されている「コフオス(κωφός)」というギリシャ語は、「耳の間こえない」と訳することもできる言葉です。さらに、並行箇所である『マタイによる福音書』では、「目が見えず」と書かれていますので、もしかしたらこの人は、目も口も耳も不自由な三重苦の人だったことも考えられます。イエスは、この人から悪霊を追い出すことをしておられたのですが、それによって悪霊が出て行くと口の利けない人がものを言い始めたので周りで見ていた群衆は驚きました。ここで「驚く」と訳されている言葉<θραυμάζω>は、「黙る」という言葉と一緒に使われることもある言葉ですので、群衆たちはイエスの業に驚き、そして、黙ってしまったのでしょう。おそらく、それまで「ザワザワ」と騒いでいたイエスを取り囲む人々が、イエスが悪霊を追い出す様を見て「驚いて黙ってしまう」のに対して、それまでは“口の利けなかった人がモノを言いはじめる”、皮肉とも言える対比が、ここに鮮やかに示されています。群衆たちは、ただ、驚いただけではなく、中には敵対するファリサイ派の人などもいたでしょうから、その人たちから、「あの男は悪霊の頭ベルゼブルの力で悪霊を追い出している」と言う者もいました。おそらく、多くの者たちは、驚いて黙り込んでしまったのでしょう。イエスの業について何も言えない人たちに対して、口が利けるようになった人は、その時から、おそらく、自分がイエスによって口が利けるようになったことを多くの人たちに言い広めていくことでしょう。ここでも鮮やかな対比が描かれています。信仰を持つ者と悪意を持つ者の心が表されています。

「ベルゼブル(Βεελζεβοὺλ)の「ベル」とは、“君主”や“主人”を表す言葉で、ベルゼブルとは“悪霊の頭”を意味し、ペリシテ人たちの神「バアル・ゼブル」(ヘブライ語「באל־זבול」[住居の主](Ⅱ王 1:2)に由来しています。かつて、北イスラエル王国のアハズヤ王は、自分が病気になった時に、この「バアル・ゼブル」のところへ使者を送り助言を求めました。それが、今や、イエスが癒しを行うと、人々は、この“ベルゼブルによって悪霊を追い出している”と言うのです。人間とはなんとその時の自分の都合や状況によって自分が付く側を変え、相手を攻撃してしまうものなのでしょうか。

19 節には、「わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出すのなら、あなたたちの仲間は何の力で追い出すのか。」というイエスの言葉があります。イエスが病人たちを癒す話が多く福音書に記されていますので、イエスだけが癒しの業を行ったかのように感じてしまいますが、この当時はユダヤ人たちも悪霊の追い出しを行っていたようです。“魔術の知識に長けたソロモンの名のもとに悪霊を追い出していた”とされています。そこでイエスは言うのです。イエスが“悪霊の頭によって、悪霊を追い出すことになれば、あなたたちも悪霊の頭によって悪霊を追い出しているということになるのではないか。それでは、私たちは同じである”ということです。しかし、もちろん、それは違っています。

ユダヤ人たちの悪霊を追い出しとイエスの為さる業が決定的に違うのは何か、それは、“イエスの為さることは神の業である”ということです。イエスの為さる悪霊の追い出しは、霊は霊でも悪霊ではなく、「聖霊」の力によって為されることです。それはまさに 20 節にあるように、「神の指で悪霊を追い出している」、ということなのです。

本日の旧約聖書の箇所を『出エジプト記』8:12-15 としました。ここは“モーセとアロンがイスラエルの民をエジプトから去らせて欲しい”とエジプト王ファラオに頼む場面です。頑なファラオはモーセの願いを聞き入れることをしないため、モーセは神の言葉に従って様々な業を繰り出します。その 10 の業の内、三番目の、ぶよがエジプト全土を襲ったとき、ファラオに付いている魔術師が秘術を用いて同じようにぶよを出そうとしてもできなかったため、ファラオに、「これは神の指の働きでございます」と言っています。すでにここで、神の力によって示されることが、「神の指」であると言われています。「神の指」とは“神の力ある業”のことなのです。また、神は自らの指で、十戒の言葉を記したことから、神がモーセを通してイスラエルの民に与えた『十戒』のことも指します。この十戒の中心的な戒めは、“唯一の神のみを神としなければならず、ほかの神々を拝んだり、偶像作ってはならない”ということであることは、皆さんもよくご存じのことと思います。つまり、イエスが神の指によって悪霊を追い出すということは、ベルゼブルによるものではなく、唯一の父なる神の力によって悪霊を追い出していることを示しています。

前回、私がこの講壇からお話したのは、本日の直前の箇所、ルカ 11:5-13 でした。そこでは、“求め続けることの大切さ”をお話ししました。“ただ一度求めるのではなく何度も何度もしつこいぐらいに求め続ける”こと、そして、“祈り続けることの大切さ”、そして、“祈り求め続ける者に対しては天の父なる神は必ずや聖霊を与えてくださる”と語りました。その話の直後に、ルカはどうしてこの『ベルゼブル論争』という小見出しの付けられている話を書いたのでしょうか。私はそのことを少し考えてみました。

今日の箇所で、最初に出てくる「口の利けない人」、もしかしたら耳も聞こえず、目も見えなかったかもしれない人は、他の人に自分の祈りを語る事ができませんでした。だからといって、この人が祈っていなかったとは言えません。きっと誰よりも深く、強く、祈り続けていたことでしょう。“口が利けるようになりたい”“話がしたい”、その思いを、何度も何度もしつこく祈っていたはずです。その人がイエスに出逢い、イエスの業によって悪霊を追い出してもらい、話ができるようになったのです。この人にとっては、どれほどの喜びだったのでしょうか。

しかし、それを見ていた人々は純粹にこのことを喜ぶことができないのです。驚嘆の声は挙げましたが、そして中には、この人とともに喜んでくれた人もいたでしょうが、それ以上に、イエスを悪く言う人たちがいたのです。しかし、イエスは、そんな彼らの心の内を見抜いておられました。17 節、「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう」、イエスによれば、もし悪霊たちの支配者が悪霊たちを追い出しているというのなら、それは内部分裂を起こしているのであり、そうなれば悪霊たちの世界は内部分裂によって荒れていってしまう。それをイエスは、家に譬えて、「内輪で争えば、家は重なり合って倒れてしまう」と語っています。

イエスの知っている国は、そのような悪霊の住む世界とは違っているのです。天の王国は内部分裂もなく、神と神の子を象徴する堅い岩の上に建てられた頑丈な家です。だから分裂することも倒れてしまうこともなく、

永遠に立ちゆく王国なのです。

20 節には、イエスが「**神の指で悪霊を追い出しているならば、神の国はすでに来ている**」とあります。そして、21 節に「**強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である**」とあります。つまり、神の国が到来して、神の業によって敵である悪霊たちが追い出されるならば、また、家の中に敵が入り込まないように神の武具によって充分に武装するならば、王国も家も内部分裂することなく平和に過ごせるのです。そしてそこに示される最高の徴は神から与えられる聖霊なのです。

聖霊の力によって、私たちは常に一步前へと押し打され平和への道を歩んでいくことができます。悪霊の力に頼らずとも人々が平和に暮らし、共に歩んでいくことができるのです。この人間の社会において分裂なしに世界が成り立っていくことはとても難しいことだというのは、昨今の世界情勢を見ていると充分に分かることです。神の力を信じ、神から与えられる聖霊の力によって歩む時には、分裂を避けて生きて行くことができます。私たちが生きているこの世界、地球上のこと、それはもちろんですが、もっと身近な事を考えてみても同じことが言えるでしょう。地域社会で小さな諍いがないと言えるでしょうか。そして、私たちが信仰生活を守っている教会の中で争い事がないと言えるでしょうか。そこに集う人々の中で揉め事がないと言えるでしょうか。それは、“この教会が…”、ということではありません。世界中の教会で、また宗教間で揉め事があり、諍いがあり、争い事があるのではないのでしょうか。しかし、私たちは、そのことに気が付いているのでしょうか。

私は、医師であるルカが、“求め続けなさい、探し続けなさい、門を叩き続けなさい”と言ったのは、“決して諦めてはいけない”という思いを込めたのではないかと思っています。ルカ自身医師であっても、この当時であれば、直せない病も多く、時に、諦めも生じていたことでしょう。しかし、諦めてしまえば、そこにあるのは滅びでしかありません。そこに希望はないのです。ルカは、“**イエスが「神の指」によって悪霊を追い出すことで、神の国は、あなたたちのところに来ている**”と言います。神の国は祈ることを止めてしまうなら、もう、そこには到来しないのです。祈ることを止めてしまえば聖霊は与えられることなく、私たちは神の御力を知ることなく、諦めの世界に陥ってしまうのです。国が分裂し、家々が倒れてしまうように、その先に、希望を見ることができないまま終わってしまうのです。“それではいけない”と、ルカは言いたかったのではないのでしょうか。

悪魔との戦いは終わることがないものだとと言えるでしょう。しかし、そこに、神が介入してくださるなら、その戦いは、いつか終止符を打つことができます。私たちにとって悪との戦いとは一体何でしょうか。様々な誘惑や悪魔の囁きが、常に私たちの身の回りには溢れています。それらに取り込まれてしまうならば、私たちは神に愛される者としての日々を過ごすことはできません。悪の頭ではなく、唯一無二の神の力によって、聖霊の力によってのみ、私たちは信仰を強く固く守り生きて行くことができます。そのことを忘れずに生きて行きたいと私は願います。それは私自身にも言えることであり、今、私はそのことを強く感じています。

聖霊の力を信じ、前を向いて歩いていきましょう。そのような、私たちを、神は歎び、主は御心のままに私たちを導いてくださるはずです。私たちも「**神の指**」で導いていただきましょう。その時、必ず道は開かれます。

共に祈りを合わせましょう。

主なる神さま。私たちにとって、病は自分の力ではどうすることもできないものです。医学が進んだ現代でもなお、病気によって私たちの生活は混乱し不安な日々を送ることにもなります。しかし私たちは主なる神から送られる聖霊の力によって、病の中にあっても穏やかな日々を過ごすことができることを知っています。どうか神さま、私たちにいつも聖霊をお送りください。その聖霊の働きによって、私たちの毎日の生活を痛みや苦しみがある中においても、穏やかで安らかなもののできるよう、あなたの「**神の指**」で導いてくださいますように。

この小さき祈り、我らの主イエス・キリストの聖名を通して御前にお献げを致します。アーメン。

讃美歌:377「神はわが岩」

献金・感謝(藤田幸子)・主の祈り(讃美歌21 93-5A)

父なる神さま、主にある兄弟姉妹と共に礼拝を献げることが赦されましたこと感謝致します。説教を通して豊かに御言葉を与えてくださり感謝致します。私たちがこの一週間を、夫々の旅路の中で、御言葉を糧として歩むことができますようにお導きください。

私たちは必要な物を与えられ、主の僕として生きることが赦されていることを感謝致します。今、夫々が与えられた物の中から、感謝と献身の徴を御前にお献げします。どうぞ祝して教会の御用のために用いてください。

主が教えてくださった主の祈りを共に祈り、新しい日々を迎えさせてください。「**主の祈り**」…アーメン。

派遣:讃美歌 90「主よ、来たり、祝したまえ」

祝福:主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、私たちと共に、何時までもありますように。アーメン。

報告:(1)細牧師:司式者の祈りにもありましたけれども、昨日、小倉信夫さんの受洗式が予定通り執行されましたことを改めてご報告いたします。バプテスマの恵みによって、小倉信夫さんのこれからの歩みが主と共に、また教会と共にありますように。お祈りください。
(2)管理委員会:補修工事進捗状況、他。

後奏:「**おお幸いなる光よ、三位一体よ**」(G.B. ファゾーロ)